

「第39回 全国中学校バスケットボール大会に出場して」

札幌市立北陽中学校 山田 秀剛

4月の部活結成集会で、選手一人一人が最終目標（決意表明）を言うのですが、その目標が大きすぎると飾りになり、ぼやけてしまうものだとは忠告してから始まりました。全員が目をキラキラさせて口にしたことばが何と『全国制覇』でした。私にとっては、とても重いことばでした。今までの勤務校（空知時代）で何度か全国大会に行けそうなチャンスがありましたが、その都度あと一步で敗れて、私自身の詰め甘さが課題でありました。選手には、どれだけ大変なことなのかを話し、自分にも言い聞かせてからスタートしたことを思い出します。

今年のチームは一年生の頃からとにかく怪我に苦しめられました。恥ずかしい話ですが、最後の中体連まで一度もベストな状態で戦ったことがありませんでした。怪我については、（中体連に関して）北陽時代だけではなく、前任校・前々任校の時もベストな状態で戦ったことはありませんでした。そんな苦い経験を学習してきたのにも関わらず、同じ事を繰り返していたことを反省する日々でした。改めて、コンディショニングの重要性を再確認し関わってきました。特に、成長段階が早い選手や早期からチームの中心となる選手のケアについては気を遣いながら進めていきました。（プレイは出来るけど体が幼い、跳べるけど骨が柔らかい、疲労が抜けづらい、食べ物の好き嫌い等）

本題に戻します。昨年度の新人南大会で3位となり、決戦大会に出場できましたが、接戦の弱さとリバウンドの意識の低さが露呈し、予選リーグ敗退となりました。意気込んで臨んだ札幌春季大会でも準決勝敗退。いつも、ライバルチームが決勝戦を戦っていました。その都度、最後は「自分たちが勝つ！」と確認しながら次へ進んでいきました。

5月に福島県の泉崎 CUP に出場し、道外強豪チームと戦い、通用する所と修正を要する所が明確になり、急ピッチで練習しました。特に、リバウンドに関しては毎日の練習は勿論、どの試合でも高い意識で果敢に奪いにいけるようになりました。

札幌全市大会（中体連）は決勝まで駒を進めることができ、決勝のコートに初めて立つことが出来ました。相手は、志村3兄弟の中央中でした。新人南大会ではコテンパンにされ、練習試合でも歯が立ちませんでした。会場は中央中を見ようと超満員。地元にも関わらず、完全アウェイ状態でしたが、逆に集中し燃えることができました。4月から全国・全中・鹿児島等のことばを封印していましたが、試合開始前に「この試合は全中切符をかけた試合」と告げました。選手はニヤッとしながら、気合いも入り、戦う顔に変わりコートに向かっていきました。

試合の指示は、相手の3Pとドライブは徹底的に止める（※ミドルの2点はOK）ことを指示し、前半は3P1本に抑えることができました。出だしに3Pをファウルしてしまい、3ショットとなってしまうりましたが、ポイントとなるプレイとなりました。試合は北陽優位に進むものの、要所で粘る中央中が得点し、最後の最後まで息が抜けない状況でした。DFは2-2-1~3-2ゾーンで進め、勝負をかけたときに1-1-2-1に変更することを言っていたのですが、思いの外2-2-1が利いていたため、変えることを迷ってしまいました。選手は、何時変えるのかをキョロキョロしていましたが、状況を見極め、判断するべきと考えました。いつもの私であれば、ずっと練習しているプレスで勝負したくなり、変えて失敗するケースが多々あったので、そのことを思い出しながらコーチングしていました。最後の最後までわからない試合は、何とか北陽が5点差で逃げ切り優勝することができました。今までの思いは、優勝したシーンの映像が全てを物語るものでした。

全道大会は、準決勝まで順調に勝ち進むことが出来ました。私にとっての鬼門が準決勝なので、選手以上に私自身が気を引き締めました。当麻中との一戦は、走り勝った北陽が勝利することができ、念願の決勝に駒を進めることができました。決勝の帯広緑園とは、決戦大会でも戦い、あと一步まで追い詰めながら敗れているので、いかにして持ち味を生かし、後半に勝負するかを考えていました。前半は辛うじて付いていけたものの、後半になり足を止めてしまったのが北陽でした。準優勝ではありませんでしたが、北陽中にとっても、私自身にとっても初めての全中の出場権を獲得できました。

長くなりましたが、本題の全国大会の報告を致します。

全中までは、コンディショニングを最重点に考えながら練習に励みました。リバウンドが勝敗の鍵を握るというのは承知していたので、実践の中で何度も確認して取り組みました。また、確実に得点するためにドライブも、全中までかなり重みを置きながら、強引なドライブも含め練習して大会に臨みました。

鹿児島全中

予選リーグ (F)

8/20 10:50 ~ 北陽480 vs 藤崎460 (青森県 東北ブロック1位)

【17-4 11-24 10-12 10-6】

2-2-1プレスからスタートし、相手がどの程度プレスダウンを準備しているかを確認しました。また、プレスをしながら自チームのリズム作りも考えて試合に入りました。

事前に見たDVDでは、全く問題なくプレスダウンしていたものの、このゲームの入りは初戦と言うことで緊張していたのか、藤崎にミスが続き北陽優位に1Qを終えることができました。2Qも順調に入ったものの、OFのミスから相手に走られてしまい、あっという間に追いつかれ同点で前半を終了しました。レベルの高さを身を持って実感しました。

後半は、1-1-2-1プレスで入り、相手の攻撃を抑えたものの、北陽も得点源が思うように機能せず、3Qを終了。ただ、事前の練習で特に力を入れたリバウンドが要所で奪えていたので、得点以上の効果があり、次へつながっていると確信し、4Qに向かわせました。

勝負の4Qは、お互いに点数が入らず、最後の最後まで全く勝負の行方がわからない試合でしたが、DFリバウンドは確実にものにしていたので、かなり集中できていました。同点で迎えた終盤に相手のパスミスから速攻につなげ、勝利を手に入れました。

※試合が終わり、応援団含め盛り上がっていましたが、次のゲームまで1時間20分、それまでにストレッチ(柔軟~アイシング)、昼食と苦慮していたところに、記念撮影が入りました。次のゲーム後に頼もうか迷いましたが、大至急で済ませるということでお願いしたものの、10分程度の時間がかかってしまうという計算外のこともありました。

8/20 13:30～ 北陽53● vs 久米620 (愛媛県 四国ブロック2位)

【5-16 10-18 20-19 18-9】

出だしから全く足が動かず、防戦一方。次々と失点。ORからの失点が続き、たまたまタイムアウト。DFが機能しないので、OFの流れも悪く、11点ビハインドで1Q終了。選手はすでに疲れ切っていました。

メンバーを少し変えて、コートに向かわせたが、これが誤算。初戦に出場していない選手なので緊張で全く機能しない。レイアップの落とす等、全く良いところなく、前半終了。19点ビハインドになる。

3Q、相手のエース④を抑えるために、ダイヤモンド・ワンをして、何とか一桁差まで縮めることに集中させるが、これがまた誤算。相手に触れた瞬間に全てファウル。先にコースに立っているだけでもファウルを取られる。これが3連続ファウル。システムを切り替えるしかなくなる。得点が欲しかったので、インサイドの⑦佐藤を外に出すしかなかった。(北陽の80%以上の得点を④上田⑤大久保⑦佐藤の3人が稼ぐチームのため)残りの2人はリバウンドに集中させ、追いつけるが、なかなか詰められず18点ビハインド…。

4Q、かなり状況が厳しいのは誰もが承知していたが、決して勝利をあきらめなかった。1勝しているのに、少しでも点差を縮めておきたかった。審判がゲーム開始から不安定だったので、多少のファウルは覚悟して、オールコートでプレッシャーをかけた。ファウルは重なるものの、チームに勢いが出てきて、4連続で3Pが決まる等、7点差まで縮まる。

途中から、審判が笛を吹けなくなっていたり、オフィシャル(地元の中学生)も相手のタイムアウトが流れる等、荒れたゲーム展開となる。たまたま2Aレフリーの蒲氏がTOまで来る程のゲームとなりました。

最後は、チームファウル～フリースローで9点となりタイムアップ。万事休す。

※振り返ると、7点差まで詰めたときに、残り時間が1分21秒。さらに時間が流れ、1分を切り、私は選手に3Pの指示を出しました。今、振り返ると勝敗が並ぶこともあるので、2Pを確実に狙わすのがセオリーだったと反省しました。

最終的に、藤崎 vs 久米の一戦は最後の最後で久米が逆転を許し、ゴールアベレージとなり、北陽が僅差で予選リーグ敗退となりました。「あの時のショットが…、あのプレイが…」等を言っても仕方ありません。指導者がその状況で判断して、決断しなければなりません。特に、劣勢になっているときこそ迷わないで決断を下すだけの力量をつけないといけないと考えます。普段の練習から、どれだけ伝えられていたか?不足部分を次のチームで生かしていけるようにしなければ、今回の全中で学んだことが台無しになってしまいます。

子ども達が鹿児島で流した涙は、普通の涙ではありませんでした。確かに量も多かったでしょう。そうではなく、負けて流す涙と相手の勝敗によって天か地が決まるゲームをドキドキしながら見て、最後の最後で目の前から権利がなくなるという厳しい現実で3年間が終了するという終わり方でした。理想的な終わり方はあまりないと思いますが、全てを出し切って、終わらせてあげるのが理想(ベスト)だと思いました。子ども達には、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

全中【「夢の舞台」「夢の場所」】に出場して、コンディショニング(※現地でトレーナーを雇う等、北陽はしませんでした…)、試合時間(=試合順)と試合間の(時間の)使い方、現地での前日練習(※仲間の先生に確保してもらいました)等、今振り返るとできることは自分なりにしたつもり

でしたが、まだまだ足りなかったような気がします。指導者がやるべきことをしっかりすることで、選手はもっと試合に集中できるのだと、改めてわかりました。

「全中」の感想を一言で言えば、『何度も出場して挑戦したい舞台』です。次にまた全中に出場できるように、今回の貴重な機会を無駄にせず、日々目の前の選手と夢の舞台に向かって前進していきたいと思います。

最後になりましたが、今まで数多くの方々に支えていただきました。北海道ジュニアバスケットボール連盟の方々、札幌地区ジュニアバスケットボール連盟の方々、南空知地区ジュニアバスケットボール連盟の方々、美唄バスケットボール協会の方々、練習試合の相手をしていただいた高校・中学校のチーム関係者、共に競い合い・語り合った先生方、保護者、本校学校関係者、その他の全ての方々にこの場を借りて感謝とお礼申し上げます。

※今回のレポートでは、「全国」ということがメインでしたが、内容の多くを全中前のことで占めてしまいました。今までの失敗談をお知らせした方が身近に感じられる人も多いように感じたからです。今回の報告が少しでもお役に立てたら嬉しく思います。

最後にこのことばで締め括ります。～人間、本気になれば、大差なし～ (ある学校に掛けてあったことば)